あいコープみやぎのネオニコチノイド系農薬排除の取り組みについて

生活協同組合あいコープみやぎ　理事長　**高橋千佳**

あいコープみやぎは設立当初から「より自然で安全な食べ物を自分たちの国で」「自然環境との調和を大切に」と産地と共に歩んで参りました。特にネオニコチノイド系農薬（以下ネオニコ）削減については、段階的に米からスタートし、野菜、そして最も難しいと言われている果樹への挑戦を続けています。生産者の決断と産地を支える組合員の活動の歩みをご報告致します。

きっかけは環境学習会

2010 年 9 月にダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議の中下代表による環境学習会でネオニコチノイド系農薬がミツバチ、人や環境にも影響を及ぼすことや、浸透性で洗っても落ちないことなどを学びました。危機感を高めた翌月には、農産協議会の場でネオニコ削減を提案し、東日本大震災の直前の 2 月には、組合員向けに機関紙にて稲作からネオニコ排除を宣言しました。同時期に開催された生産者団体である共生会の総会にてネオニコの危険性について産地と共に学びを深め、ネオニコ不使用の方針を固めました。

ネオニコ排除のスタートはお米から

2011 年は、津波で被災した七郷地区を除く宮城県内の産地がネオニコ不使用を達成しました。翌年には、七郷地区の田んぼの復興と同時にネオニコ不使用が叶い、被災して瓦礫だらけの景色から一変、収穫時の黄金色に輝く稲穂が蘇った田園風景は今でも忘れられません。その翌年の産地交流では白鷺が戻ってきており、ネオニコ不使用の成果を感じることが出来ました。

「やっぺしりんご」スタート

2012 年には、あいコープの果樹栽培の産地「天童果実同志会」にネオニコ排除の提案をしました。あいコープの前身である仙台協同購入会の設立後まもなく、せっけん運動をきっかけに出会った産地です。生産者とともに学びの時間を持ち、翌年の 3 月から天童果実同志会の会長が自らの園地を実験圃場とする決断をしてくださいました。オーナー制を導入したところ予想を上回る 450 人もの組合員がこの挑戦を応援し、「やっぺしりんご」（やっぺしは山形弁で「やってみよう」を意味する「やってみっぺし」から）と名付けられました。実験圃場の取り組みが 1 年経った 2014 年には、「天童果実同志会」全会員の園地でネオニコ不使用に。ネオニコを排除したことで、今までのネオニコの効力を痛感しながらも、剪定を工夫するなど、出来る対策に苦心しました。ネオニコに代わり安全なボルドー（カルシウム剤）を使って白くなったりんごを組合員は納得して食べました。

樹を守るための苦渋の決断

ところが、順風満帆とはいきませんでした。取り組みを始めて 8 年目の 2020 年の夏には、リンゴの葉にびっしりとキンモンホソガが大発生。緊急防除としてネオニコを使用せざるを得ない状況になってしまったのです。りんごの木を枯らしてしまっては、生産者の生業が立ち行きません。生協と産地の話し合いで止む無くネオニコを使用した樹もありました。

最近では、温暖化が進み、東北で見たことのない害虫を見るようになりました。さらに、どうにか実った果実にも日焼けによる被害が起こり始めました。ネオニコ使用の有無以前に、気候による大きな問題が産地を襲います。それでも私たち組合員の願いに応えようと挑戦を止めない産地には感謝しかありません。

「トライりんご」再スタート！

やっぺしりんごとして始まった減農薬りんごは、2019 年にネオニコ等を禁止するあいコープの新農産区分「トライ・アイズ」が始まったことから「トライりんご」として商品カタログ掲載されています。このトライりんごを守り、農薬削減することでリスクを負う生産者を支えるため、2023 年、オーナー制を復活させました。2 年目を迎えた 2024 年度は総勢 202 人の組合員が応募しました。出資金で産地を支える「食卓で応援コース」と、更に実際に産地で作業も行う「生産者なりきりコース」があり、剪定から花摘み、摘果、着色管理、収穫など 8 回の工程を体験できます。

子どもたちの未来を有害化学物質から守り、よりよい環境を残すために、食べる側と作り手を繋ぐ活動をこれからも重ねていきます。